
オロチ

くる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オロチ

【Nコード】

N9139B

【作者名】

くる

【あらすじ】

古の魔物、ヤマタノオロチ。聖神スサノオにより滅ぼされたと、云われてきた。が、死んではいなかった。一匹の『オロチ』となり、影に潜み、今に生き、人を喰らう。再度魔物が混沌とする世を築くために。

1・触手

今宵は満月が美しい、幻想的な空だ。

私は空き地に雑然と生い茂る草の間をすりぬけて、葉の無い枯木に登った。

いい眺めとは世辞でも言えないが、居心地はなかなかだ。

だが、この辺りには獲物がいない。住んでいないのだ。そろそろ移らねばならないか。

探さなければ。

私の腹を満たす生き物。

人間が住む場所を。

翌日。

生憎の曇り空だ。

雨が降り出しそうだがそんな事を気にしている場合では無い。
新たな場所を探すのだ。

静かなこの地を後にし、私は細い身体をうねらせ、アスファルトの上を這う。私が喰らい尽くしたせいかわ、周りは無音状態である。

最も此処は人気が無い。

もう少し遠くへ行かなければ、満足な量の人間はいないだろう。

現世は実に不便な時代だ。我々にとって、何か物足りない世界。

昔は美しかった日本も、灰色の薄汚れた地と化した。時代の流れと共に、我ら魔物の住みやすい環境は消え行き、下位の鬼、妖魔は殆

ど消滅し、上位の者も危うい状況だ。

いや・・・魔物だけでは無いかも知れん。私も・・・かの聖神により、この身を砕かれた。

あの剣は私の身を裂き、纏う光は私の汚れを浄化した。奴は粉々になつた私に背を向け立ち去り 天に帰った。

だが私は死してはいなかったのだ。

砕かれた身の破片に魂を移し、静かに時を過ごしていた。

そして今。

かの神は眠り、魔物も失せかけているこの時代。

我々魔物が世を喰らう絶好の機会ではないか？

人間は無力だ。

だが邪魔だ。

奴らめを滅ぼし、再びこの世を支配するのだ。

道路の真ん中を堂々と滑る私。

段々、人の声が近くなってきた。

見つからないよう、私は古い民家の塀の草を伝い、姿を隠した。

来た。

若い女だ。携帯電話を耳に当て、甲高い声で電話の向こうの人物と会話をしている。派手な恰好を・・・

こういった類の人間は大抵強気で、様子をみず挑発してくる。己の無力さも知らずに。

愚かな。

女は平然と歩いている。
私は古家の木に登った。少しばかり枝葉も生えており、その枝は堀からはみ出している。

好機。

私も腹が減っている。

この女を喰らってやるぞ。今にも殺されるという事も知らずに、女は話し続けている。

消え去れ。

私は牙を向き、愚かな女に飛び掛かった。

2・赤目の子

私はドブの脇を伝い、先へ進む。口の周りが血に染まってしまったため、舌でペロリと拭った。

あまり美味ではなかったな・・・現代人はあまり良い味ではない。弱いくせに、不味い。

それが不服だ。

暗く乾いたドブを這っていると、闇の向こうから子の啜り泣きが聞こえてきた。小刻みにしゃくり上げ、高い小さな声が響く。

私は、動きをとめた。

子の赤い眼が私を見つけ、そしてこちらに飛び掛かってきた。

「黒煙を纏い、世を喰らい尽くす最恐の魔物がそのような姿で」
鼠は哀れみの表情で私を見つめる。

「貴様、何者だ」

私は動じず、舌を出したり引つ込めたりを繰り返していた。

奴は警戒する私に構わず、歩みよってくる。

「覚えてないと？それは残念であります・・・私は女王ヒミコに仕えし者であります」

「貴様も生き延びた、と言う訳か」

「ええ、貴方のほうが先輩ですがね、ハハハ」

ヒミコとやらを直接見る事は無かったが、強大な呪術師だということは知っている。私の敵、とも言えるだろう。

その女の兵と名乗る鼠は、瞳に涙を滲ませている。

「でも仲間がいて少し安心しました。何せ現代には魔物が数体しか存在しない、内一人と会う事ができたのが奇跡だ・・・しかも大物」

数体、か。

「名を何と申す」

鼠は曲がった髭を立たせてニヤリと笑う。

「名前なぞありません。私は下級の妖魔、鼠と呼ばれていただけです」

「貴様は何故生き延びた」

「何故？困りますね返答に・・・使命を果たすため、でしょうかね？」

「使命だと？」

「カンナを殺しにね」

心臓が痺れるような感覚に襲われた。

まだ生きているのか？

いやまさか。

「カンナは死んだ、でも実際はそうではない、新たな肉体に魂を移したのです。貴方のように。あの呪術師は・・・今も生きています」
鼠は空気の臭いを嗅ぐと、私に背を向けた。

「どうした」

「人間の臭いがします。私は貴方と違って、有害動物の姿ですのでね。見つからないようにしないと」

そう告げると、走って闇の奥へ消えていった。

「カンナを殺すとな。雑魚め、何処へ隠れているのだろうか」
私はドブの外へ這い出ると、再び塀に登った。

鼠の鼻の言う通り、人がいる。

車の音が近い。

つまり、このまま直進すれば大通りに出られるはずだ。

私が前にたむろっていた公園も、通り付近にあった。この地域は
駄目か。
更に遠くを指さねば。

道に魔物どもはいないだろうか。
あの鼠を引き止めておくべきだったか・・・

私も、あの呪術師を殺さねばならん。

私はそのまま大通りに向かい進んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9139b/>

オロチ

2010年10月11日04時16分発行